

小規模農業という人間中心の開発の誕生

そのノウハウがメキシコからニカラグアに移転したわけ

長野県農業大学校農学部総合農学科教授 吉田太郎

メキシコの援助で始まった土壌・水保全プロジェクト

前回、グアテマラの経験に学んでメキシコに「グルボ・ビセンテ・ゲレロ」と呼ばれる農民開発組織が誕生した、と述べた。一九八六年、メキシコのNGO「平和と開発サービス」を通じて、このグルボ・ビセンテ・ゲレロは、ニカラグアの「全国農牧民組合」と協働し、二年間の「土壌・水保全プロジェクト」に取りかかる。目指したのは、ニカラグアの農民たち自らが運営するプログラムの確立だった。ニカラグアのカンペシーノ(百姓)たちがまず、メキシコのトラスカラを訪れて、初歩的なトレーニングを受ける。それから翌一九八七年に、今度はメキシコから農民指導員がニカラグアを訪れて、数週間をその「生徒たち」の村で過ごした。これが、

後にニカラグアでカンペシーノ運動が大躍進を遂げる発端となるのである。

メキシコからニカラグアにやってきた若い女性指導員のひとり、アリシア・サルミエントさんは、遠く故郷を後にした初めての海外旅行についてこう話す。

「私は、一八歳でした。有機農業を教えるのが仕事で、人々は興味を持ってくれました。ですが、『コントラ』からの攻撃に脅えていました。ニカラグアで起きたこと、子どもたちがなぜ餓死していったのかを知り、祖国のことを深く考えさせられました」

グルボ・ビセンテ・ゲレロのリーダーのひとり、ロヘリオ・サンチェス氏はこう想起する。「夜中も『コントラ』が襲ってくる不安にさいなまれながら床につきました。同志たちはハン

モックや板のベッドで眠ることに慣れなければなりませんでした。ですが、これがニカラグアの現実だと自分を納得させたのです。これは障害ではなく与えてくれた試練だと。ですが、もし、私がカンペシーノではなく、大卒の技術者だったら、とても耐えられなかったでしょう」⁽¹⁾。

指導員たちの会話に登場する『コントラ』という耳慣れない単語の意味を理解するため、まずは、以下の文章を読んでみていただきたい。「夕方の五時ごろになると決まって私を強姦しました。来る日も来る日も交替で犯したので、膣が使い物にならないとみるや、今度はいつせいに肛門を犯しました。五日間にわたって六〇回も犯されたのです」

これは、ニカラグア北部のエステリ州にある

サンディニスタ革命政権が作った協同組合農場の二児の母親の発言だ。農場には、彼女を含め、八人の女と一五人の男が暮らしていたが、農場が「コントラ」の襲撃を受けたのだ。コントラは彼女が見ている前で、夫を殺し、もう一人の住民の眼球をえぐりだした。別の協同組合農場の住民はこう語る。

「農場には一五歳の少年がいました。お腹をざっくりと切り裂かれ、腸が地面に引き伸ばされて置いてありました。まるで縄みたいだね」

住民を面白半分に殺し、女たちは強姦される。少女を拉致して売春婦として売り飛ばす。赤ん坊は石で叩き潰し、女たちの乳房は切り落とし、顔の皮を剥いで、逆さ吊りにして出血死させる。刈り取った首を棒の先に突き刺す。一九八〇年代のニカラグアではこんな状況は当たり前だった⁽⁴⁾。

コントラとの戦いで荒廃した国土

ことは七年前に遡る。一九七九年、ニカラグアでは左翼ゲリラによる革命が成功する。中南米ではキューバ革命以来二〇年ぶりの出来事だった。ニカラグアは人口五四〇万人。一人当

たりのGDPは二二〇〇ドルとグアテマラよりもさらに貧しい中南米の最貧国である。おまけに、以前のキューバと同じく、人々は圧制に苦しめられていた。一九三六年から米国の傀儡であるソモサ一族による独裁が四〇年も続いていたのだ。教育政策ひとつとっても、小学校には子どもの六五%しか入学できず、うち学校を止めずに六年生までなるのは二二%という有様だった。だから、国民の約半分が非識字者だった。

ソモサが米国に逃亡して、新革命政権が誕生すると、革命政権は直ちに大胆な医療と教育改革に取組んだ。医療費は無料になり、貧しい人でも医者にかかれるようになった。大規模な識字力向上運動も始まり、半分以上もいた非識字者が一九八一年には九分の一まで減少した。革命政権は、文化政策も推進し、国民はニカラグアの文化に自覚め、一連の女性解放政策を通じて、社会の様々な場に女性たちも参加するようになった。一九八一年には農地改革法を制定し、ソモサ一族がいろいろに牛耳っていた大農場を解体・国有化して、貧しい小作農たちに分け与えた。農民一人ひとりの自発的意志が活かさ

れるような農業改革を強力に進めたのだ。

だが、これがまずかった。改革がうまく進んだのも一九八一年までだった。メキシコやグアテマラの例を見ればわかるように、中南米で農地改革に手をつけることは死を意味する。たちどころに、米国の逆鱗にふれた。革命を危険視した米国は露骨な内政干渉を始める。C.I. を使って旧ソモサ独裁政権時代の国家警備隊を中心に反革命ゲリラ勢力を集結させ、内乱を起こさせるのである。スペイン語では反革命のことをコントラ・レボルシオン

(contra-revolucion)と言いが、この米国が組織したゲリラ部隊こそが「コントラ」だった。だが、コントラは形の上でこそゲリラだったが、兵士の給料は米国が支払い、食料から戦闘服、武器弾薬まですべてを米国が提供していたのだから実態は米国の傭兵部隊といってよかった。そして、米軍と協力し、このコントラ侵略を許したのが「軍隊を捨てた平和な国」としてもてはやされている「コスタ・リカ」だった⁽⁵⁾。一九八一年、コントラは、コスタ・リカとホンジュラスと国境を越え、南北からニカラグアに攻め込んだ。

だが、金で雇われた傭兵ゲリラと比べ、革命を守るという大儀に燃えた政府軍は強かった。そこで、米国は軍事面での援助を強化し、コスタ・リカとホンジュラス領内にコントラ訓練用の基地を建設。毎年多額の援助を行い、破壊活動や民間人の誘拐・殺害を繰り返させた。サン・ディニスタ政権は、国連やハーグ国際司法裁判所などを介して訴え、八六年には国際司法裁判所が、ニカラグアへの攻撃は国連憲章をふくむ国際法に違反する」との判決を下すが、米国は無視し、軍事介入をますますエスカレートさせた。

最盛期にはコントラの兵力は一万五〇〇〇人にまでに膨れあがる。その対応で戦費はともどもなく増大し、国家予算の約五〇％にまで達する。教育や社会保障予算は削減されたが、それでも革命政権は教育改革を続けようとした。そこで、コントラは、革命政権のシンボルである学校と教師に重点攻撃を加えた。多くの教師が殺され、学校が破壊された。生徒も戦場にかりださざるをえなくなり、改革の成果は失われた。だが、一九八四年の大統領選挙では六七％の票を得て圧勝する。貧しい人々の信頼は失わ

れていなかったのだ。

だが、それでも米国は、攻勢の手を緩めない。一九八一年から始めた経済制裁を強化し、一九八五年には全面禁輸に踏み切る。これで、ニカラグア経済は大混乱に陥り、一九八八年には二〇〇〇％という信じがたいインフレで、紙幣は紙クズ同然となり、失業者が増大した。一九九〇年の総選挙では米国が後押しするビオレタ・チャモロ候補に敗れ、一年続いた社会主義革命は終わりを遂げた。

カンペシーノの運動の誕生

いささか前置きが長くなったが、カンペシーノ運動はこうした悲惨な政治的混乱と内乱の中から登場したのだし、その進展が政治背景とは切り離せないため、紹介した。

話を元に戻そう。さて、一九八六年にメキシコから指導にきては見たものの、当初は運動はかんばしくはなかった。指導員、ロヘリオ・サンチェス氏は、こう想起する。

「最初のワークシヨップは困難でした。成果がぜんぜん見えなかったからです。ただ、幸いなことに、ホセ・ヘサス・メンドサのような人物

と出会えました。彼は、自分の農場で熱心に取り組み、ごく短期間でマメの収量を増加させたのです。それをデモンストレーションしたことは説得力があり、人々は彼の例に倣い始めたのです」⁽¹⁾

ニカラグアの山村、サンタ・ルシアで農業に従事するホセ・ヘサス・メンドサ氏は六〇代の根っからの農民だった。

「四年前、私は鋤で土地を全部おこして畑の準備をしていたんです。大雨で土が全部流され瓦礫しか残りませんでした。以前は一〇a当たり四袋の豆が獲れたものでしたが、以来一袋しか収穫できなくなりました。ですが、一九八七年の一月に農牧民組合を通じて、メキシコのNGOから土壌保全のレクチャーを受けます。教えられた技を使うと八八年には六袋の収穫をあげられたのです」

その技とはテラスや溝を使うことだった。「まず溝とテラスを作ったんです。一〇〜四％も傾斜がある斜面に溝を掘り、豆を植え付けました。もっと急斜面には土が流れないように果樹を植えました。溝は一日で四〇m作れますし、今年は、テラスに沿って石を置いて、溝

の側面には草を植えるつもりです。雨が降っても作物の周りにマルチを敷くので水分が蒸発しませんし、雑草を抜かなくても良いのです」

ニカラグアの農民は雑草をよく燃やしていたが、メキシコの指導員は窒素分に富んだ有機質肥料として雑草を活用することも教えた。

「今、堆肥の山が一一あります。それはタタですし土壤浸食を防ぎ、多くの命を育み、味の良い果物をもたらしてくれます。そのうえ、輸入肥料を買わずにすむのです。雑草を厩肥、水、土に混ぜていると、皆が私に気が狂ったと言いました。ですが、収量が倍増したので目にするとうと、どうやったのかを知りたがりました。以前は農地を拡大することが生産の落ち込みを補う唯一の手段だと思っていたので、大地主になることを夢みていましたが、今はどう土地を耕せばよいのかがわかっていて、自分の土地だけで全く問題がないんです」⁽²⁾

ホセ・ハサス・メンドサは、革命政権派だったが、後に「コントラ」派だった近くの町にもカンペシーノ運動を広めることに成功する⁽¹⁾。

さて、革命政権が、一九八一年に農地改革に

着手したことは述べたが、革命政権は同時に、受益者を革命の前衛とするため、全国農牧民組合を設立した。そして、内戦が始まると、カンペシーノたちを味方に引き入れようと、「サンディニスタ農業協働組合」を立ち上げ、多くの農地を分配していく。一九八四年には、肥沃な農地の五分の一に相当する約九七万haが組合化されて四万五〇〇〇人のカンペシーノが恩恵を受け、一九八八年には約九三万haの農地が小作農民の四分の一以上にあたる七万七四三〇戸にわけられた。一方、この農地解放で、大地主や多くの中規模の生産者は、約七〇万haもの農地を失い、反革命派に与していくことになる。

内戦が続く中、全国農牧民組合は、カンペシーノたちを革命側に引きこもると、一九八八年に首都マナグアのコンベンションセンターで会議を開催し、二〇〇〇人以上の農業協同組合のリーダーたちを集めた。

全国農牧民組合の指導部の後ろの壁には革命の旗やスローガンが掲げられ、全員が国歌とサンディニスタの賛歌を歌った。だが、ほとんどのカンペシーノたちは、組合指導部の演説を

聞こうとはせず、雑談をしていた。ところが、農業大臣が農地改革の演説を始めると、突然、聴衆の中から、サンタ・ルシアの農民指導員エルネスト・エレラが、大きなマメを手に立ち上がり、こう叫んだのである。

「土壌と水保全のカンペシーノの学校が、このサンタ・ルシアの地で産み出したものを皆さん全員にお示ししたい。見てくれ、この豆のサヤを。六〇個以上ついているだろう。皆さん誰もがサンタ・ルシアで土壌を保全するやり方を学ぶようお誘いしたい。この豆をその象徴として農業大臣にさしあげたい」

会場は突然、熱狂の渦に包まれた。これが、全国農牧民組合の土壌保全プロジェクトが、カンペシーノ運動に転換した瞬間だった。

会議の後、ニカラグア全域からカンペシーノたちが、サンタ・ルシアにやってくる。初めは三々五々だったが、噂が広まるにつれ、NGOも交流訪問団を送りだす。

一九八九年には、「メキシコ平和と開発サービス」がニカラグア政府に農民主導型の開発手法を紹介し、ニカラグア全域でカンペシーノ運動を通じて持続可能な農法が広まっていく。例

えば、同年に、サンタ・ルシアの八人の指導員たちは、土壌・水保全の技術を地区の農民たちの一五%まで広げていた。一八km以上の溝、一〇〇以上の堆肥の山、六kmのテラス、約一・六kmの防風林が作られていた。だが、二年後の一九九一年には、「カンペシーノ運動プロジェクト」の一〇人以上の指導員たちが五〇〇回以上のワークシヨップを開き、約三〇〇〇人のカンペシーノが受講する。「カンペシーノ運動プロジェクト」のリーダーシップで二のNGOが、ゆるやかなカンペシーノ運動推進体へと組織化される。一九九五年には、「カンペシーノ運動プロジェクト」だけで約三〇〇〇人の指導員と三〇〇〇人の会員を抱えるまでとなり、二〇〇〇年には指導員は一四八七人まで増え、ニカラグアの農家の二八%にサービスするまでになったのだ。五年も経ずして、技術は国内の乾燥地域から准乾燥の山岳地帯、国境の熱帯雨林にまで広まっていた⁽¹⁾。

経済危機による近代農業破綻で広まった持続可能な農業

さて、カンペシーノ運動がニカラグアで爆発

的に発展したのには、いくつか理由がある。第一は、小作農階級が革命の核だったことだ。内乱は起きたものの農地解放は進み、二万人もの農民が農地を取得し、伝統的な日雇労働者、ワーキングプアの身分からは逃れていた。また、識字力向上運動で、読み書きを習った他、様々な教育を受けたことで、協同組合として団結することも学んだ。さらに、ヨーロッパ、カナダ、米国と全世界から国際協力のボランティアたちがやってくる。革命期のニカラグアは、ラテンアメリカ全域から進歩的な人々を呼び寄せる磁石のような存在だった。ヨーロッパの社会民主政権やリベラル左翼、NGOも、米国の代理戦争に反対し、革命を支持し、サンディニスタ政権を援助していた。

時代は違うが、一九三六年にスペインでは人民戦線による共和制政府を不満としたフランコ將軍が反乱を起こし、全土にわたり激しい内戦が始まる。フランコはナチスに協力を求め、ゲルニカで世界初の市民無差別爆撃が行われる。そして、人民戦線を応援しようとして、世界各国から数多くの知識人や労働者が義勇兵として参加する。その中には、作家ヘミングウェイ

もいた。

これと同じように、ニカラグアにも世界各国から数千人も国際連帯グループが入国し、農村を旅し、劇、コンサート、その他の文化行事を行ったりした。世界の文化や新たな思想にふれたことがカンペシーノたちの意識改革につながったのだ。

第二は、一九八八年に中米を襲ったラ・フアナ、ハリケーンであろう。ハリケーンの被害はすさまじく、大西洋沿岸の町は破壊され、中央高原地帯の山腹では何百万トンもの表土が、その年のトウモロコシの種子や肥料とともに押し流された。だが、サンタ・ルシアでは、ハリケーンの経路であったにも関わらず、土壌保全の溝とテラスが洪水に持ちこたえ、その年は豊作だったのだ。その違いは明確で劇的だった。

第三は、一九八九年のサンディニスタ政権の経済崩壊である。キューバの有機農業も経済危機を発端に起こったが、それと似ている。

なるほど革命政権は、農業の振興や格差是正を目指してはいた。ソモサ独裁政権が所有していた農場を押収し、国内で最も生産的な農地の二〇〜二五%を管理下にもおいた。だが、その

農政は決してエコロジ的なものではなく、モデルとされたのは、旧ソ連や経済危機以前のキューバ型近代農業だったのである。農業省内の主流は、ハードな開発路線派で、大規模で機械化された農工業複合体や国营農場の開発を目指していた。中には、小規模農民の支援やオルターナティブな技術を論じた一派もいたが、指導部からはロマンチックな理想主義と相手にされなかった。

サンディニスタ農業協働組合も同じで、農民たちを革命側に引き入れるため、低利の融資、農薬、トラクタに補助金を出すことで、農業の近代化を進めたい、メキシコの窓口となった全国農牧民組合もそうだった。小規模の農民益を代表する組合ですら、土壌と水保全プロジェクトにはさほど期待していなかった。メキシコ人たちの小規模な、人間中心の農民主導型開発「よりも、「緑の革命」やキューバのソ連の技術を組み合わせた近代農法の方が優れている」と考えていたからだ。

だが、ハリケーンの大被害と経済崩壊のダブルパンチで、近代農業はゆき詰まる。融資、ハイブリッド種子、農業化学資材は提供できなく

なり、協同組合への技術支援も打ち切られる。1年のうちに、ニカラグアの農村は、国からの補助金を受けて国から管理指導される近代農業から、伐採や焼畑技術を用いる原始時代の生き残り自給農業に逆戻りしていた。杜撰な技術と不適切な管理でほとんどの農地は地力を失っていく。ところが、これとは対照的に、緑肥、保護溝、地元の種子選抜、作物多様性の改善といったカンペシーノの技術を用いた農場は、生産性をあげるうえで劇的な力があり、劣化していく農業の中で、際立っていたのである¹⁾。

カンペシーノ運動を支える技術
では、カンペシーノ運動が急普及したわけを技術的に見てみよう。その成功は、一言でいえば、ビロド豆(*Mucuna pruriens*)に多くをよっている。ビロド豆とは、元々、緑肥として米国南部で使われていたものだ。中米ではまず一九七〇年に南メキシコでその存在が発見され、後に東ホンジュラスでも見つけた。そこでは伝統的な休閑地の被覆作物として使われていた。

前回は登場したホンジュラスのローランド・バ

ンチ博士らの「持続可能なエコロジ」と人間を中心にした農業のための「コンサルタント協会」と「国際被覆作物情報センター」の専門家は、この豆に有機物と窒素固定、雑草防除で優れた効果があることに着目し、プロジェクトに取り入れる。そして、いったん豆を手にするカンペシーノは、豆をどう活用するか、様々な小規模な実験を自分たちでやり始める。結果は上々だった。豆は、最大三〇t/haの有機物を生産し、一五〇kg/haの窒素を固定し、雑草も効果的に抑えた。

緑肥となり、有機物の供給源となり、マルチとして土壌浸食から土や水を保全し、雑草を抑える。さらに、豆は酸性土壌にありがちな養分不足の問題も解決した。生産の制約となるネックを効果的に克服できる豆は急速に広まっていく。

豆がタダなことも普及に一役買った。準備資金が全くかからず、借金する必要がなく、普及するうえでも経費のかかる普及プログラムは不要だった。一握りの種子、実験への意欲、ある農民から別の農民へと伝えられるわずかばかりのアドバイス。それが、広範な普及に必要な

なすべてであった。化学肥料や農薬を使う近代農業とは違って、豆は農業生態系の生態機能そのものを改善することで収穫量を高める。化学肥料は時が経つにつれて農業生態系を劣化させたが、豆はそれを改良し、使う農民は、害虫の減少、干ばつ抵抗性の高まり、収穫物の品質の高まりという増収以外のメリットも感じた。

このビロード豆が、それ以外の数種類の緑肥作物とあわせて、ホンジュラスからカンパシーノ運動を通じてニカラグアに導入されたのは一九九〇年のことである。だが、それが、契機となつてカンパシーノ運動を太平洋岸の平野部から中央高原地帯まで広げることにつながつたのである。

さらに、このビロード豆には面白いエピソードがある。豆はニカラグアに限らず、中米全域に広まつていくのだが、同時に思想的なメッセージも伝播していった。

つまり、豆を手にした農民たちは、「これほど役に立つ植物があるのに、なぜ、農学者や農業普及員はこのことを教えてくれなかったのだろう」と彼らの指導を疑問に思う。ママは簡単に手に入れられ、実験も簡単だった。そこで、

農民たちは、次に研究者や農学者、技術者に幻滅感を覚えると同時に、自分たちの農民主導型の農業開発と自立に強い自信を持つことになるわけだ。もちろん、研究者たちも豆の存在を知らなかったわけではなく、例えば、メキシコのトウモロコシ小麦研究所(CINMYT)もこのビロード豆は研究調査していた。ところが、研究所の農学者は、カンパシーノ農業では地元由来種で栽培が行われているという事実を無視して、ハイブリッド・トウモロコシ品種で試験を行い、「ビロード豆での間作は収量減をもたらす」と結論づけていたのだ。その後、トウモロコシ小麦研究所のエコノミストは、トウモロコシのビロード豆との間作がモノカルチャー農業よりも高収益であることを認めるが、農民たちはそうした結論をまたずに、豆の持つメリットを目のあたりにし、正規の農業研究機関や普及センターの援助を一切受けることなく、自分たちですでに豆を広く普及させていたのである⁽¹⁾。

このエピソードは、二つの重要な視点を示唆している。農民たちを交えず、エリート研究者たちだけが行う従来のトップダウン型の研

究や品種育成には限界があること。持続可能な農業では、「緑の革命」の高収量品種よりも在来品種のほうがむしろ収量があがること。この2点だ。実は、キューバではカンパシーノ運動が普及するにあたり、この「農民参加型の品種改良」が大きなファクターとなつていくのである。

(注)コスタ・リカは「軍隊を捨てた民主的で平和・中立の国」として語られている。たしかに憲法では、常備軍を禁止している。だが、非常時には軍隊を組織できることを規定している。同時に警察の半分を占める治安警備隊は、対戦車ロケット砲等で重火器装備されている。海外からは事実上のコスタ・リカ軍とみなされている。治安、諜報、対テロ特殊部隊も存在し、多くの将校が、米国やイスラエル等の軍事学校で軍事教練を受けているとされる。また、コントラの出撃基地、支援基地の自国内設置を認める見返りとして、コスタ・リカは80年代に米国から4億ドル以上の援助を受けた。国民一人当たりでは、当時のイスラエルに次ぐ額で、その多くが、警察隊の軍事訓練と装備に当てられ、警察の軍隊化が進んだ⁽⁵⁾。

【参考文献】

- (1) Eric Holt-gimenez, “ Campesino A Campesino : Voices from Latin America's Farmer to Farmer Movement for Sustainable Agriculture ” ,Oakland, CA, Food First Books,2006.
- (2) Eric Holt-Gimenez, “ Campesino a Campesino : Sustainable Development from Below ” , Global Pesticide Monitor, May 1990.
- (3) Gregory Hansen, Alexa Shore, Gregory Siasoco, “ Assessment of Education Policy, Country Report for The International Economic Development Program 2004 ” , Cuba in Transition, May 6, 2004.
- (4) デイヴィッド・コグズウェル、ポール・ゴードン(著)、佐藤 雅彦(翻訳) (2004) 「FOR BEGINNERS シリーズ・チョムスキー」現代書館
- (5) 新藤通弘(2002)「最近のコスタリカ評価についての若干の問題」『アジア・アフリカ研究』アジア・アフリカ研究所,2002 年第2号 Vol.42, No.1

【固有名詞】

NGOメキシコ平和と開発サービス(SEDEPAC=Servicio de Desarrollo y Paz Asociacion Civil)

グルボ・ビセンテ・ゲレロ(Grupo Vicente Guerrero)

全国農牧民組合(UNAG=Union Nacional de Agricultores y Ganaderos)

サンディニスタ農業協働組合(CAS= Sandinista Agricultural Cooperatives)

カンペシーノ運動プロジェクト(PCAC=Proyecto Campesino a campesino)

ラ・フアナ(La Juana)

持続可能なエコロジーと人間を中心にした農業のためのコンサルタント協会(COSECHA= Asociacion de Consejeros para una Agricultura Sostenible, Ecologica y Humana)

国際被覆作物情報センター(CIDICCO=Internacional de Informacion Sobre Cultivos de Cobertura)

【地名】

トラスカラ(Tlaxcala)、サンタ・ルシア(Santa Lucía)

【人名】

アリシア・サルミエントス(Alicia Sarmientos)

ロヘリオ・サンチェス(Rogelio Sanchez)

ホセ・ヘサス・メンドサ(José Jesús Mendoza)

ルイス・メヒア(Luis Mejia)